

# 留学生の来日1年目の文化受容態度と精神的健康<sup>1</sup>

東京外国語大学<sup>2</sup> 井上孝代・和光大学 伊藤武彦

## Acculturation attitudes and mental health of international students in their first year

Takayo Inoue (Japanese Language Center for International Students, Tokyo University of Foreign Studies, Sumiyoshi-cho, Fuchu, Tokyo 183) and Takehiko Ito (Department of Human Development, Faculty of Human Science, Wako University, Kanai-cho, Machida, Tokyo 195)

The aim of the present study was to show relationship between acculturation attitudes and mental health of international students in their first year in Japan. Of 53 new international students at a university, 50 (36 male and 14 female), 19.2 years old on average, completed a questionnaire in May (one month after the arrival), October (six months later), and March of the following year (the last month of the first academic year). The questionnaire consisted of two parts: Acculturation Attitude Scale and SCL-90-R Mental Health Scale. The former was based on Kim (1988) and measured four types of acculturation attitudes: Integration, Assimilation, Separation, and Marginalization (Berry, 1990, 1992; Berry, Trimble, & Olmedo, 1986). Results indicated that effects of acculturation attitudes on mental health of international students became clear in the last month of their first year. It is argued that helping students' integration attitude has beneficial effects on their mental health.

**Key words:** international students, attitude, acculturation, mental health, SCL-90-R.

本研究では、来日1年目の留学生個人が、日本において異文化接触を体験して、自文化と相手文化に関するどのような態度をとるかを“文化受容（アカルチュレーション）態度”(acculturation attitudes)(Berry, 1980, 1990, 1992; Berry & Kim, 1988; Berry, Kim, & Boski, 1989; Berry, Kim, Mindle, & Mok, 1987; Berry, Kim, Power, Young, & Bujaki, 1989; Berry, Poortinga, Segall, & Dasen, 1992; Berry, Trimble, & Olmedo, 1986)の問題として取り上げ、それと精神的健康との関連を検討する。

“文化受容”(acculturation)<sup>3</sup>は、“異なった文化をもっている個人の諸グループが持続的・直接的に接触をし、その結果、元来の文化パターンを片方、または双方のグループが変化するような結果を生ずる現象”を包含し(Redfield, Linton, & Herskovits, 1936)，もともとは集団の変化に適用された概念であるが、留学

生の異文化接触による変化など、個人レベルにもあてはまる概念である。

Berry (1980)は文化受容の用語が相手文化の摂取の観点からのみ論じられることを批判し、新しい異文化接触をもったときの文化受容態度として四つの態度の類型を提示している(Berry, 1990, 1992; Berry et al., 1986など)。それは、“統合(integration)”, “同化(assimilation)”, “分離(separation)”, “周辺化(marginalization)”であり、自文化と相手文化(本研究では日本)に対する態度によって決定されるとする<sup>4</sup>。この四つの態度はFigure 1にある二つの質問を肯定するか否定するかで分類される。すなわち、異文化接触事態におかれた個人がその相手文化や社会との交渉を求め、もとの文化やアイデンティティの維持を望まないとき、それは“同化”的度をとると定義される。反対に自分自身の文化に価値をおいて相手の社会や文化との相互作用を避ける道を選択したとき、その選択の道は“分離”と呼ばれる。自文化の保持をすることと、相手文化・人々との日常的交渉の双方を追求するときには、“統合”的度が強いという。“周辺

<sup>1</sup> 本研究は平成5年度文部省科学研究費(一般研究C, 課題研究番号05610096, 研究代表者: 井上孝代)の補助を受けた。

<sup>2</sup> 留学生日本語教育センター。

<sup>3</sup> 江畑・箕口・曾・斎藤・原・丹羽(1996)の訳語によった。“文化変容”という訳語(渡辺, 1995)や“異文化化”(Segall, Dasen, Berry, & Poortinga, 1990 田中・谷川訳, 1995)という訳語もある。個人を問題にするときにはacculturationを“文化受容”，集団を問題にするときには“文化変容”と訳しわけるのも一方法と思う。

<sup>4</sup> Berry (1980)では“分離”という表現の代わりに“拒否rejection”, “周辺化”の代わりに“脱文化化deculturation”という表現が用いられている。本研究ではその後の文献の表現に従った。また，“周辺化”は“境界化”と訳されることもある(渡辺, 1995)。

化”とは自分の文化的アイデンティティの保持にも関心がなく、相手社会・文化との関係の保持にも関心がほとんどない態度である。

これらの文化受容態度は異文化接触過程においてストレスや行動変化に影響を与え、その社会への適応に影響を与える重要な要因の一つである (Berry, 1992)。

Berry (1980, 1992; Berry et al., 1986など) の文化受容理論に基づき、Kim (1988) は韓国系カナダ移民を対象に文化受容態度尺度を作成し、この文化受容態度尺度と精神的健康との関連があることを示し、文化受容態度が移民の適応に対して影響要因として働くことを明らかにした。また、Leon, Wagner, & Kim (1995) は Kim (1988) の文化受容態度尺度を用いて留学生における“統合”的態度の強さがカウンセリングの受け入れへの態度の影響要因となっていることを見いだした。

日本においては、Berry (1980; Berry et al., 1986など) の文化受容理論に基づき、井上・伊藤 (1995) が、来日留学生を対象とする事例研究を行い、身体症状を伴う適応困難を示した留学生の3事例について、適応困難のある時期に“統合”的態度が弱まることなど文化受容態度と適応との関連性を見いだした。

本研究では、Berry (1992) の文化受容ストレス理論に基づいて、文化受容態度がどのように留学生の精神的健康に対して影響するかを明らかにする。文化受容態度尺度は Kim (1988) の56項目のうち、来日留学生向けに28項目を選んで作成した質問紙(質問項目は井上 (1996) を参照)を用いて、来日1年目の留学生の文化受容態度が精神的健康に対してどのような影響をもたらすかということを縦断的に調べ、パス解析による因果モデルを作成し、文化受容態度の精神的健康度に及ぼす影響を明らかにしたい。

なお、本研究が対象としているのは、井上・伊藤 (1995) と同じ国費学部留学生の来日1年目の適応過程である。この1年間は、学生にとって留学初年度にあたり、日本語教育を中心とした予備教育の後、2年

## 目的

本研究の目的は留学生の文化受容態度が精神的健康に対して来日1年の間にどのように影響するかを縦断的な研究によって明らかにすることにある。

## 方法

**被験者** 対象となっているのは国費学部留学生で、Tセンターで予備教育をうけている在日1年目の留学生53名全員を対象に調査し、このうち3回すべての質問紙が回収された50名(男性36名、女性14名: 平均年齢19.2歳)の回答が分析の対象となった。国籍は、タイ(8人)、マレーシア(6人)、フィリピン(5人)、カンボジア(5人)、シンガポール(5人)、インドネシア(4人)、モンゴル(4人)、オーストラリア(4人)、ルーマニア(2人)、ベトナム(2人)、ネパール、セネガル、ナイジェリア、モロッコ、ラオス、ハンガリー、西サモア、パプアニューギニアの国々がそれぞれ1人で、アジア系留学生がほぼ8割を占めている。

**質問紙** 文化受容態度尺度として、Kim (1988) の質問紙調査で用いられた文化受容の四つの態度尺度のうち、日本への留学生にとって適切と思われる7分野28項目を選び作成された。改訂英語版と英語-日本語バイリンガル版の文化受容態度尺度(井上, 1996a, 1996b)を用いた。各項目の日本語訳は井上(1996b)を参考にされた。

精神的健康を測定するためには、20か国以上で用いられている尺度であるSCL-90-R(Derogatis, 1983)を用いた。この尺度は身体化、強迫症状、対人敏感性、抑鬱症状、不安、敵意、恐怖症状、妄想観念、精神病質の九つの下位尺度と付加項目あわせて90項目からなる。利点として、短時間で対象となる人間の健康状態のプロフィルが得られることが挙げられる<sup>5</sup>。

**調査の実施** 調査は、1993年の5月(時期1: 来日1か月後)、10月(時期2: 来日6か月後)、および1994年の3月(時期3: 来日1年後)の三つの時期に本人に渡し、約1週間以内に本人より直接回収した。

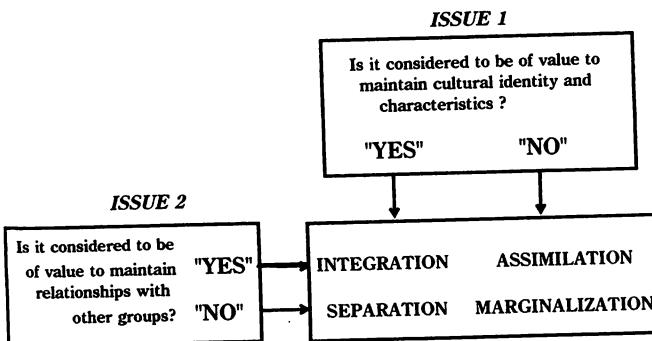


Figure 1. Four attitudes toward modes of acculturation defined in relation to two questions (Berry & Kim, 1988).

<sup>5</sup> SCL-90-Rを53項目に短縮した版としてBrief Symptom Inventory: BSI(Derogatis & Spencer, 1983)があり両者の相関はきわめて高いことが知られている(Derogatis, 1983)。

被験者らは英語も含んだ留学生選抜試験の合格者であり、日本語能力はさまざまなので、時期1は、英語版を用い、時期2、3は英日バイリンガル版を用いた。

## 結 果

### 文化受容態度の変化

三つの時期の文化受容態度の得点を探索的分析の箱ヒゲ図として、25パーセンタイル、中央値、75パーセンタイル、および外れ値をFigure 2に示す。得点は1—5の値をとり、高いほど各々の文化受容態度が強いことを示している。Table 1に各回の尺度得点の平均と標準偏差を示した。

平均値の比較のため、繰返しのある分散分析を3回の各調査ごとに四つの文化受容態度について行った。第1回目は $F(3, 147) = 96.36$ 、第2回目は $F(3, 147) = 66.24$ 、第3回目は $F(3, 147) = 121.94$ でいずれも $p < .001$ 水準で有意であった。各調査の平均値を比較すると、第1回目は“統合”(3.95) > “周辺化”(2.91) > “同化”(2.51) = “分離”(2.33)、第2回目は“統合”(3.73) > “周辺化”(3.01) > “分離”(2.40) = “同化”(2.37)、第3回目は“統合”(3.93) > “周辺化”(2.92) > “分離”(2.42) = “同化”(2.36)の順に並んだ(Scheffé法による多重比較で“>”は5%水準で有意差あり、“=”は有意差なしを示す)。“統合”が最も高く、“周辺化”がそれに次ぎ、“分離”と“同化”は得点が低いという一貫した傾向が四つの態度得点間に、3時期をとおしてみられた。

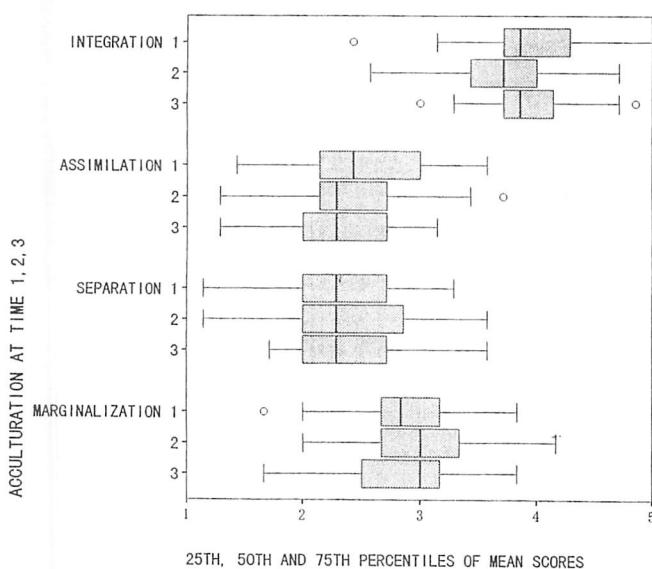


Figure 2. Mean acculturation attitude scores for four attitude types at Time 1, 2, and 3.

Notes: The boxplots indicate the 25th, 50th, and 75th percentiles.  $N=50$ . ○ denotes an outlier. Time 1: One month after the arrival; Time 2: 6 months later; and Time 3: 12 months later.

Table 1  
Means and standard deviations of four acculturation attitude scales and a mental health (SCL) scores at Time 1, 2, 3

Attitude Scale	Time 1		Time 2		Time 3	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
Integration	3.95	.51	3.73	.51	3.93	.41
Marginalization	2.91	.47	3.01	.54	2.92	.45
Separation	2.33	.50	2.40	.55	2.42	.46
Assimilation	2.51	.55	2.37	.57	2.36	.47
SCL (GSI)	.65	.44	.74	.51	.84	.58

Notes:  $N=50$ . Rating points range from 1 to 5 for acculturation attitude scales. Higher point indicates higher tendency of the attitude. Rating points range from 0 to 4 for SCL scales. The lower the SCL (GSI), the better the mental health.

次に四つの文化受容態度の尺度ごとの、3回の調査での時間的変化をみる。各態度の変化を繰返しのある測度の分散分析によって比較すると“統合”( $F(2, 98) = 7.27, p < .01$ )と“同化”( $F(2, 98) = 3.59, p < .05$ )には平均値の差がみられたが、“分離”( $F(2, 98) = .95$ )と“周辺化”( $F(2, 98) = 1.04$ )には有意差がなかった。“統合”では第1回目(3.95) > 第2回目(3.73)と有意に平均値が減少したが、第2回目 < 第3回目(3.93)にかけて得点が増加し、第3回目 = 第1回目となった。同化では、第1回目(2.51) > 第2回目(2.37) = 第3回目(2.36)となり、第1回目の平均値が第2回目で下がり、その傾向が第3回目まで続いた。

### SCL-90-Rによる精神的健康

精神的健康の状況とその変化をFigure 3に示す。各回の九つの下位尺度間の順位相関の値の範囲は、.42—.89と高かった。各回の下位尺度得点を探索的因子分析(主成分法、バリマックス回転)したところ、3回とも1因子しか抽出されなかった。また、信頼性係数は、3回とも $\alpha > .95$ と高かった。従って、本研究では、SCL-90-Rの総合平均値である総合重症度(GSI: Global Severity Index=90項目の平均点, Derogatis, 1983, p. 11)を精神健康度の指標とし、Table 1に各回の平均値と標準偏差を示した。

Figure 3の箱ヒゲ図や総合重症度の平均値から明らかなように、本研究での被験者はSCL-90-Rの得点が低い値に偏っている。これは本研究の被験者がおおむね精神的健康を保持していることを示している。しかし、中国帰国者の調査結果(江畑・箕口・曾・齊藤・原・丹羽, 1996)よりは高く、精神症状尺度

(SCL-90-R の短縮版である BSI を使用) の総合重症度 (GSI=.37-.40) と比較すると有意差がみられた<sup>6</sup>。

### SCL-90-R の総合重症度 (GSI) の時期的変化

三つの時期の SCL-90-R の総合重症度 (GSI) の平均値の差は、繰返しのある分散分析により確認された ( $F(2, 98) = 4.42, p < .05$ )。事後テスト (Scheffé 法,  $p < .05$ ) では、第1回目 (.65) と第2回目 (.74) との間に有意差はなく、第2回目と第3回目 (.84) との間にも有意差がなかったが、第1回目と第3回目の GSI に有意差がみられた。すなわち、来日後、約1年間で精神健康度がやや低くなっていくことが示された。

### 重回帰分析による四つの文化受容態度と総合重症度 (GSI) との関係

各時期ごとに、その時々の文化受容態度が、その時期とその後の時期の、精神的不健康的度合いをどの程度予測できるかについて重回帰分析を行った。説明変数は四つの文化受容態度得点、目的変数は SCL-90-R の総合重症度 (GSI) である。強制投入法による重回帰分析では、第3回目の文化受容→第3回目 GSI

( $R^2=.23, F(4, 45) = 3.26, p < .05$ ) のみに有意な結果が得られ、予測変数として有意な結果が得られたのは四つの文化受容態度のうち “周辺化” (標準偏回帰係数  $\beta=.41, p < .01$ ) のみであった。従って、この方法では、文化受容態度と精神的不健康度との関連が十分明らかにされていない。そこで文化受容態度の構造について分析してみよう。

### 文化受容尺度の主成分分析

SCL-90-R が健康度の項目として高い信頼性をもっているのに対して、文化受容態度の4尺度の場合は一定の信頼性があることが明らかになっている (井上, 1996a)。そこで、3回の4尺度の主成分得点を求め、相互の関連をみてみよう (Figure 4)。1回目、2回目、3回目の変化は、4尺度の各尺度内では安定しているということがわかる。と同等に第1主成分と第2主成分の2次元的な構造をもっているということも明らかになった。すなわち、第1主成分 (X 軸) として “統合” 対 “非統合” の軸、第2主成分として “自己文化優位” 対 “相手文化優位” の軸 (Y 軸) がある。四つの態度についてみてみると、第2主成分に寄与しているのは主に “同化” と “分離” のみであって、 “統合” と “周辺化” は 0 値に近い。第1主成分に対しては “統合” はプラス (左) の方向に、 “分離” と “同化” はマイナス (右) の方向に働き、“周辺化” もややマイナス (右) の方向に働いているということがみてとれる。

井上 (1996a) は日本留学経験者を対象に、文化受容の4尺度を多次元尺度法によって分析し、“統合傾

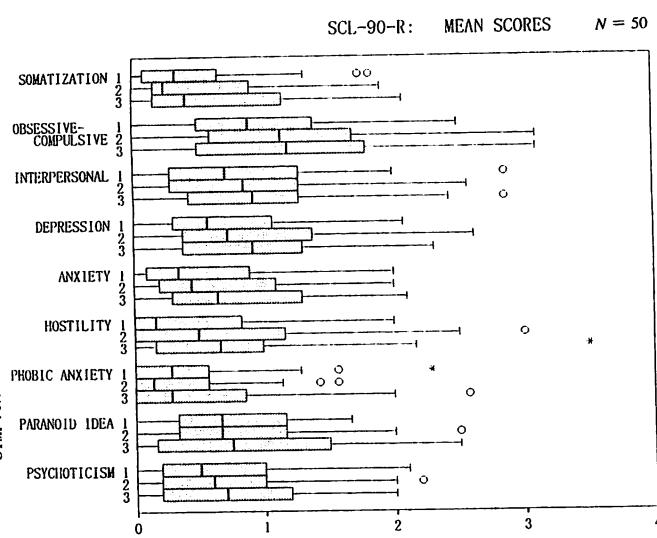


Figure 3. Mean mental health scores of SCL-90-R subscales.

Notes: 0=not at all, 1=a little bit, 2=moderately, 3=quite a bit, and 4=extremely severe symptoms existed. The boxplots indicate the 25th, 50th, and 75th percentiles.  $N=50$ . ○ denotes an outlier; \*an extreme outlier. Time 1: One month after the arrival; Time 2: 6 months later; and Time 3: 12 months later.

<sup>6</sup>  $t(452)=4.20, p < .001$ 。本研究の最低値である第1回目と江畠他 (1996, p. 57) の最高値である二世群とを比較した。

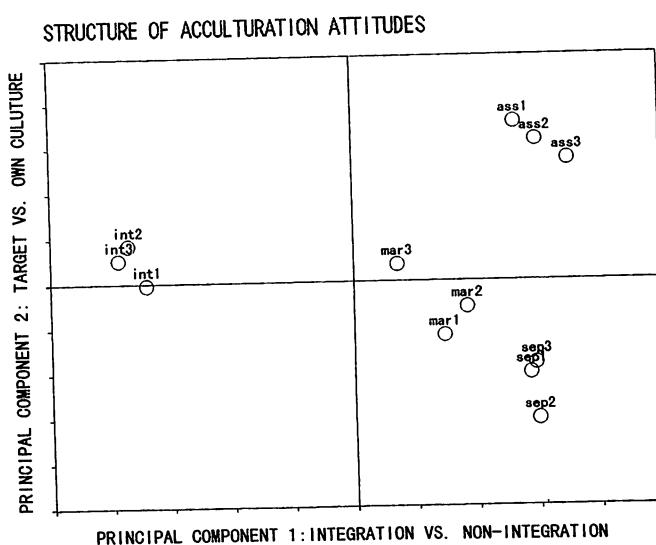


Figure 4. Structure of acculturation attitudes: A principal component analysis of four attitudes at Time 1, 2, and 3.

Notes: int=Integration, sep=Separation, ass=Assimilation, and mar=Marginalization.

向-非統合傾向”の次元と“相手文化優位傾向-自文化優位傾向”の二つの次元を明らかにしている。Figure 4にみられる第1主成分と第2主成分は井上(1996a)の二つの次元に対応している。

本研究では文化受容態度の結果を要約するものとして、第1主成分得点を文化受容態度の総合的特性を表す代表値とみなして以下の分析を進める。

#### パス解析による縦断的因果モデルの検討

文化受容態度と精神的健康との関係を因果モデルで検討しよう。文化受容の3回の得点と精神健康を示すSCL-90-Rの得点との関連をみるとFigure 5のパス図に直接的効果と間接効果(括弧内)のパス係数を示した。

Figure 5では、直接効果のパス係数の右側括弧内に間接効果のパス係数も表示され、直接効果の有意なパスは太線で、有意でないパスは細線で矢印が引かれている。直接効果をみると、文化受容の第1回目の得点から第2回目(決定係数 $R^2=.45$ )と3回目( $R^2=.19$ )が予測でき、第2回目から第3回目が予測できる( $R^2=.16$ )。また、SCL尺度においても1回目が2回目( $R^2=.39$ )と3回目( $R^2=.07$ )を予測でき、2回目から3回目が予測できることも示された( $R^2=.29$ )。つまり、文化受容態度も精神的健康(SCL-90-R得点)も同一個人内で、比較的、一貫した反応をしていることがわかった。

次に、各時期の文化受容態度と精神的健康の同時的な関係をみると、3回目の文化受容態度から精神的健康に向けたパス係数が有意であり、決定係数 $R^2$ は18%であった。すなわち、この時期になって文化受容態

度が精神的健康に影響を及ぼしているということがはっきりとあらわれた。

#### 考 察

##### 文化受容態度が精神的健康に及ぼす影響

本研究では、留学生の文化受容態度と精神的健康との間に関連があることを示した。この結果は、韓国系カナダ移民の文化受容態度と精神的健康との間に相関を見いだしたKim(1988)の結果と一致している。

しかし、留学生の文化受容態度と精神的健康との間の関係は来日直後からははっきりとみられるものではなく、12か月後になって明確になった。すなわち、文化受容態度は来日直後より留学生活のあり方を方向づけ、その結果の一つとして1年後以降の精神的健康に影響を与えることが考えられる。

井上(1996b)は、留学2年目以降の国費学部留学生の留学満足度が文化受容態度によって32%説明できるとしている。満足度が異文化適応の肯定的側面の指標であるとすると、精神的健康問題は異文化適応のマイナス面の指標である。本研究の結果はBerry(1992)の文化受容ストレス(acculturative stress)の理論で説明することができよう。すなわちBerry(1992)は異文化接触経験→ストレッサー・ストレス反応→異文化適応という構造の全過程で、文化受容態度が影響要因の一つとして各々の段階に作用すると位置づけている。本研究の縦断的調査では、来日当初は関連がないようにみえた両者の関係を、1年後に明らかな形で示すことができた。

精神健康度の総合重症度(GSI)が1年間で低下し

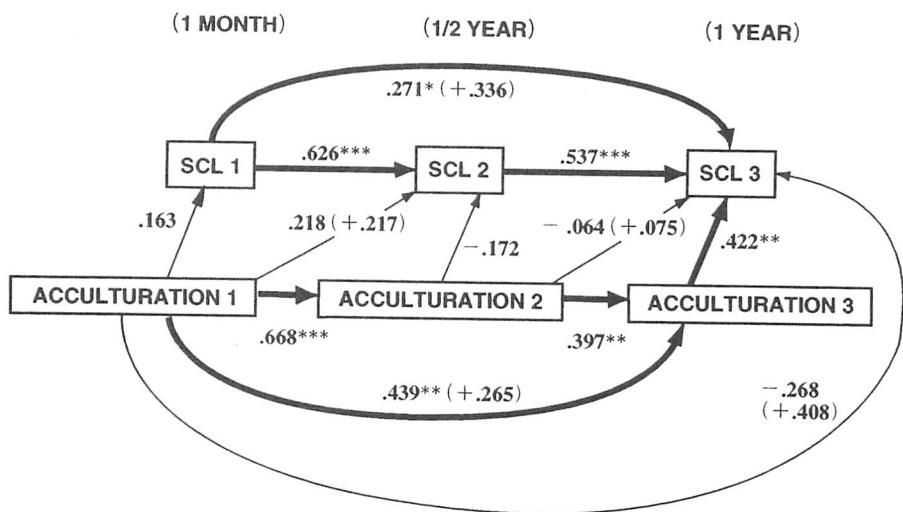


Figure 5. A path diagram of acculturation attitudes and mental health at Time 1, 2, and 3.

Notes: SCL: GSI scores of SCL-90-R, ACCULTURATION: Scores of the first principal component.

たのは、来日直後の日本社会と接触し始めた好奇心の強い時期を経て、やがて日本に対する違和感が生まれる時期に移行したことを示すもので、これはカルチャー・ショック（Adler, 1975；星野, 1980）の見地から理解することができよう。

### 文化受容態度と精神的健康との因果関係

本研究のモデルでは、文化受容態度が精神的健康に影響を与えるという1方向の因果モデルによりパス解析を行い、その影響力の強さを3時期にわたって測定した。来日1年後の段階においては、このモデルが適切と考えられた。しかし、より長期的に両者の関係を検討するとすると、異文化における適応状態が本人の文化受容態度に及ぼす影響という逆方向の因果関係も想定する必要があろう。井上（1996a）は、国費学部留学生の留学終了後を対象として文化受容態度と留学満足度との関連について調べている。この場合は、過去の留学についての満足度が現在の文化受容態度に強い影響力をもっていることが示された。すなわち、長期的に考えると、文化受容態度と留学中の精神的健康は相互に影響しあうという関係が示唆される。しかし、本研究では来日1年間の時期のみを扱っているので、1方向の影響関係が適切なモデルであると考えられる。

### 来日後の“統合”態度形成援助の重要性

Figure 4にみられたように、“統合”的態度と“同化”“分離”“周辺化”的三つの態度は第1主成分の対極にあった。井上（1996b）は、日本に在学中の留学生のうち“統合”が高い留学満足度を予測し、“分離”・“周辺化”的態度が低い満足度を予測することを示した。Sam & Berry（1995）は“統合”と“周辺化”的態度が移民青年の自己評価を予測できることを示した。またLeon, Wagner, & Kim（1995）は留学生における“統合”的態度の強さが集団カウンセリングへの肯定的態度を予測できるという結果を得ている。本研究を含め、これらの研究に共通する結論は、“統合”傾向の強い留学生は適応的であるということである。他にも“統合”という用語を使ってはいないが、自文化と相手文化の統一的尊重の態度が適応状態や満足度を高めるという結果は、Smith（1985）のマイノリティ研究やWong-Rieger & Quintana（1987）の移民と短期滞在者のバイカルチュラリズムの研究とも一致している。

留学生の受け入れにあたっては、来日直後から日本文化への意欲を保持させるとともに、本人のもっている背景的文化である自文化を十分尊重しながら、“統合”的態度が保持・形成されるように、オリエンテーションなどをとおして、日本側から働きかけるという配慮が必要である。同時に、ホスト側も“統合”的態度を

もつこと、すなわち留学生の背景である相手文化も尊重して受け入れを進めていくことが大切である。

### 要 約

1. 本研究の目的は、留学生の来日1年目の文化受容（アカルチュレーション）態度が精神的健康にどのように影響するかを質問紙調査法によって総合的に明らかにすることにあった。
2. 質問紙調査は5月（来日1か月後）、10月（来日6か月後）、翌年3月（来日1年目の最終月）の3回にわたって実施された。新留学生53人のうち、3回とも回答したのは、男子36名、女子14名の計50名（平均年齢は19.2歳）であった。質問紙の構成は（1）Berry（1980, 1992）の文化受容態度の4タイプ、すなわち“統合”“同化”“分離”“周辺化”を測定する文化受容態度尺度と、（2）精神健康尺度SCL-90-Rである。
3. 文化受容態度のなかでは“統合”尺度の得点が高く、“周辺化”が中間に位置し“分離”と“同化”的尺度得点は低かった。
4. SCL-90-Rによる精神健康度は比較的良好であったが、1年間を比較すると有意な低下がみられた。
5. 文化受容態度の4尺度は、“統合傾向-非統合傾向”的第1主成分と“相手文化優位傾向-自文化優位傾向”的第2主成分の2次元に位置づけることができた。
6. 留学生の文化受容態度が精神的健康に及ぼす影響は、来日1か月後と6か月後には認められなかったが、1年後に明確になることがパス解析により示された。
7. 自文化と相手文化の双方を尊重する“統合”的文化受容態度を留学生が形成・保持するための受け入れ側の取組みの重要性が提案された。

### 引用文献

- Adler, P. S. 1975 The transitional experience: An alternative view of culture shock. *Journal of Humanistic Psychology*, 15(4), 13-23.
- Berry, J. W. 1980 Acculturation as varieties of adaptation. In A. Padilla (Ed.), *Acculturation: Theory, models and some new findings*. Boulder, CO: Westview. Pp. 9-25.
- Berry, J. W. 1990 Psychology of acculturation: Understanding individuals moving between cultures. In R. W. Brislin (Ed.), *Applied cross-cultural psychology*. London: Sage. Pp. 232-253.
- Berry, J. W. 1992 Acculturation and adaptation in a new society. *International Migration*, 30, 69-85.
- Berry, J. W., & Kim, U. 1988 Acculturation and mental health. In P. Dasen, J. W. Berry & N. Sartorius (Eds.), *Health and cross-cultural psychology*.

- London: Sage. Pp. 207-236.
- Berry, J. W., Kim, U., & Boski, P. 1989 Psychological acculturation of immigrants. In Y. Y. Kim & W. B. Gudykunst (Eds.), *Cross-cultural adaptation: Current approaches*. Newbury Park, CA: Sage. Pp. 62-89.
- Berry, J. W., Kim, U., Mindle, T., & Mok, D. 1987 Comparative studies of acculturative stress. *International Migration Review*, 21, 491-591.
- Berry, J. W., Kim, U., Power, S., Young, M., & Bujaki, M. 1989 Acculturation attitudes in plural societies. *Applied Psychology: An International Review*, 38, 185-206.
- Berry, J. W., Poortinga, Y. H., Segall, M. H., & Dasen, P. R. 1992 *Cross-cultural psychology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Berry, J. W., Trimble, J. E., & Olmedo, E. L. 1986 Assessment of acculturation. In W. J. Lonner & J. W. Berry (Eds.), *Field methods in cross-cultural research*. London: Sage. Pp. 291-324.
- Derogatis, L. R. 1983 *SCL-90-R: Administration, scoring & procedures manual-II for the R (revised) version*. Towson, MD: Clinical Psychometric Research.
- Derogatis L. R., & Spencer, P. M. 1983 *The Brief Symptom Inventory: Administration, scoring & procedures manual - I*. Towson, MD: Clinical Psychometric Research.
- 江畑敬介・箕口雅博・曾文星・斎藤正彦・原裕視・丹羽郁夫 1996 心理状況 江畑敬介・曾文星・箕口雅博(編) 移住と適応:中国帰国者の適応過程と援助体制に関する研究 日本評論社 Pp. 53-69.
- 星野 命 1980 概説:カルチャーショック 星野命(編) カルチャーショック 現代のエスプリ, 161, 5-30.
- 井上孝代 1996a 国費学部留学生における卒業後の日本留学の満足度とアカルチュレーション 駒澤大学社会学研究, 28, 43-61.
- 井上孝代 1996b 外国人留学生のアカルチュレーション態度と留学生活の満足度 東京外国语大学留学生日本語教育センター論集, 22, 209-221.
- 井上孝代・伊藤武彦 1995 来日1年目の留学生の異文化適応と健康:質問紙調査と異文化間カウンセリングの事例から 異文化間教育, 9, 128-142.
- Kim, U. 1988 Acculturation of Korean immigrants to Canada: Psychological demographic and behavioural profiles of emigrating Koreans, non-emigrating Koreans and Korean-Canadians. Unpublished doctoral dissertation. Queen's University, Kingston, Ontario, Canada.
- Leon, F. T. L., Wagner, N. S., & Kim, H. H. 1995 Group counseling expectations among Asian American students: The role of culture-specific factors. *Journal of Counseling Psychology*, 42, 217-222.
- Redfield, R., Linton, R., & Herskovits, M. J. 1936 Memorandum on the study of acculturation. *American Anthropologist*, 38, 149-152.
- Sam, D. L., & Berry, J. W. 1995 Acculturative stress among young immigrants in Norway. *Scandinavian Journal of Psychology*, 36, 10-24.
- シーガル M. H.・ダーセン P. R.・ベーリー J. W.・ポートインガ Y. H. 田中國夫・谷川賀苗(訳) 1995 比較文化心理学(上巻) 北大路書房 (Segall, M. H., Dasen, P. R., Berry, J. W., & Poortinga, Y. H. 1990 *Human behavior in global perspective*. New York: Pergamon Press.)
- Smith, E. M. J. 1985 Ethnic minorities: Life stress, social support, and mental health. *The Counseling Psychologist*, 13, 537-579.
- Wong-Rieger, D., & Quintana, D. 1987 Comparative acculturation of Southeast Asian and Hispanic immigrants and sojourners. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 18, 345-362.
- 渡辺文夫 1995 心理学的異文化接触研究の基礎 渡辺文夫(編) 異文化接触の心理学 川島書店 Pp. 79-97.

——1996.7.4 受稿, 1997.3.15 受理——